

啓蒙とユートピア —— 18世紀のロシアと西欧 ——

川端 香男里

普通私は立ってやるのが好きなんですけど、マイクの高さが座るようにできておりますので、座らせていただきます。ちょうど今から 20 年近く前になりますが、この隣の部屋の 1 番教室というところで、ロシア文学科の初代の木村彰一先生の御定年の時の最終講義がありました。隣の部屋は大変立派な階段教室で、長谷見さんが「1 番教室でやる。」というふうにおっしゃったものですから、「初代の木村先生と同じ部屋では私は大変申し訳ない。是非何とか別のところにしてくれ。」と申しました。幸いにして 1 番教室が工事中で使えず、一段下がりました 2 番教室ということになりまして、私としましてはこの方が合っているという感じが致します。ところでこの表題について今御説明がございましたが、実はこれはとてつもなく大きな表題でありまして、正直申し上げると、アイザリア・バーリンとかフランコ・ヴェントゥーリとかいう大先生がなさって初めて意味のあるものでございます。もちろん私にはそういう話をする能力などとてもないわけですが、長谷見さんから「最終講義の題目はどうしましょうか。」と言われた時に、散々ためらった後にこういう題にいたしました。実質的な最終講義はもう既に終えております。つまり、大学の学生諸君、大学院の学生諸君を前にしての、実質的な最終講義というのは終えてございますので、いわばこれはエクストラということであります。先程も長谷見さんがちょっとおっしゃってくださったわけですが、私の学問の経歴・由来というものと若干関係があるということで、こういう題にさせていただいたわけです。先程も紹介がありましたが、教養学科のフランス科というところを私は出ておりますけれども、そこでの卒業論文がディドロでございました。その後フランス政府の給費留学生でパリ大学に参りました時にも、やはりその延長線上で、「ロシアにおけるディドロ」というのを一応 Doctorat のテーマという形にしてきたわけではありますが、その間、私の実際の本当にやりたいことは何であったかといいますと、それは中学生以来愛読していたというか、耽溺していたロシア文学です。御存知かと思いますが、その頃の東京大学には残念ながらロシア語は第二語学ではありませんでしたし、ましてやロシア文学科というものも存在していませんでした。従って本当にやりたいものというのを脇に置いて、既に存在している学科に入らなければならないということでありま

したので、冗談めかした言い方ですが、「まあ世に『露仏協商 Entente franco-russe』と言うではないか、だからまずフランスをやろう。」というような形で、大変軽薄にフランスの勉強を始めました。ところが、行くところ行くところでやっぱりロシアと突き当たることになりました。

ディドロをやりました時に私が一番感銘を受けたのは、ルッポルというロシアのディドロ研究者でありました。後ほど又ロシアの 18 世紀研究のことでちょっと触れたいと思いますが、このルッポルの本は 1935 年に刊行されてから世界的に評判になって、1936 年には仏訳が出ました。私はその仏訳本を読みまして、「ソヴィエトの学者には大変なのがいる。」ということを感じたわけです。ディドロをやるといってもどうしてもロシアとの関連ということに目がいくわけで、先程も申しました「ロシアにおけるディドロ」というようなテーマをずっとやっていたわけでありまして、フランス留学がもしもちゃんとした形でそのまま続いているとすれば、これは論文という形をとれたでありませうが、ちょうど私が留学いたしました時、アルジェリア戦争というのがありまして、フランス政府も大変手元不如意であったようで、給費を 1 年で切られてしまいました。そのため、時間の半分以上をいわゆるアルバイトに使いながらフランスに滞在せざるを得ないということがあって、むしろ人生学の勉強ということに後半はなってしまったことは、今考えれば残念なことでありましたが、幸いなことに北海道大学から「ロシア語の教師として来ないか。」という話があって、念願の、つまり私にとっては夢でもあったようなロシア学の研究に打ち込むことができるようになって、今日に至ったわけでありまして、そのため 18 世紀研究の方は、私の中ではいわば突然中断してしまったわけです。それが再び息を吹き返すということは実は何遍もありまして、1 つは、その後私が東京大学に呼ばれた時に最初に書いた本、『ユートピアの幻想』という本で、大変古い本でありまして、この本を書きました時に、もういっぺん 18 世紀的なものに非常に引かれたということがあります。ちょうど比較文学の大学院の担当ということもありまして、しばらくそういった仕事をしていたのでありますが、ロシア文学科という学科が木村彰一先生のもとで作られて、そして「お前も来い。」ということになって私が本郷に参りましてからは、（もうそれから 20 何年になりますが）ロシア文学科草創期でありまして、とてもわき見をすることが出来ないという状況で、残念ながらこの仕事は私の中の一つの底流みたいな形で、ずっと今日まで来ているわけです。その間、西洋近代語近代文学も担当しておりましたので、授業をする際には、20 世紀と同時に 18 世紀を好んで演習テーマとして取り上げ、また比較文学の大学院の担当も兼ねていることがありまして、18 世紀を昨年も 1 年間やらせていただきました。

前置きをこれだけ申し上げたところで、本論に入りたいと思います。そこにプリントのようなものをお配りしているかと思いますが、それについてちょっと簡単な説明を申し上げておきたいと思います。これは実は「18世紀学」なるものの宣伝に他ならないわけでありまして、世界的に18世紀学というものがどれだけ広い範囲で行われているかということをおおよその概念を得ていただければありがたいと思います。つまり、国際的な学会というものが18世紀研究に関してはある。そして、各国別にいろんなソサイアティーがありまして、例えばアメリカの場合ですと、『18世紀文化研究』それから『Lessing年報』という2つの雑誌が出ていて、これは非常に重要なものでありますし、それからフランスの学会からは、「DIX-HUITIEME SIECLE」（『18世紀』）という、すでに20何号数える雑誌が出ております。大体1960年前後がこういう18世紀学の目覚ましい進展の時期でありまして、この種の雑誌が大体10号から20号ぐらいを数えているというのはそういったことと符合するわけです。

ロシアの場合は、ちょっと下の方のАКАДЕМИЯ НАУК СССРというところに18世紀の「СБОРНИК」というのが右の一番下に出ておりますが、実はロシアはこの点では大変な先進国でありまして、1935年にこの「СБОРНИК」の第1号が出ています。その後は若干遅れて1940年、それから1958年という形でやっと第3号が出て、それ以後は西欧の場合と同じように着実に号を重ねて10何号というところまで今日来ている。それだけ18世紀というのは人がかたまつてまとまって総体的にやる学問である。つまり1人でやろうとすると、なかなか18世紀研究というのはできにくいというところがあつて、寄って集ってやる学問の典型みたいなものであります。そういう形で、こういうものが沢山出ているわけです。ハンガリーの学会はその中でも非常に顕著な仕事をしておりまして、左側の方に「Société hongroise」と、ハンガリーのソサイアティーが載っておりますけれども、そこで毎年Colloqueをやっております、その主要な業績というのはここにある通りであります。ハンガリーを中心とする中欧・東欧の啓蒙の研究をこれだけ積み重ねている。その研究の内容について時間があれば後で若干触れたいと思います。今日のテーマは「ロシアと西欧」となつていまして、中欧・東欧が実は抜けちゃっているのですが、中欧・東欧研究がこのハンガリーの18世紀学会を中心にして大変大きな進展を見せていることだけはちょっと申し上げておきたいと思います。これ以外にも色々な学会の名前がここにはありますが、「おやつ」と思うような国にまであります。下から3つ目に「Société japonaise」というのもありまして、これを宣伝したいわけですが、これこそ「日本18世紀学会」であります。大変グローバルな学会で、ヨーロッパ

だけではなくて日本、東洋、それからあらゆる分野を研究する人々が集まっている学会であります。これは古い資料ですから、小林善彦さんの名前が代表者として挙がっておりますけれども、現在は海老沢敏氏が確か *Secrétaire général* であると思います。こういうような「18世紀学」というものが、ソ連では1935年にもう既に始まっているということは申し上げました。これは例外的に早いのですが、ディドロ全集10巻本がロシアで出始めた年も1935年であります。ところがこれは、とうとう完成せずに終わりました。1950年頃までぽつぽつと出ていたのですが、その間に先程申しましたルツポルというディドロ学者が、1943年に粛清されて強制収容所で亡くなるというようなことまでありました。18世紀研究というのはロシアでは不幸な運命を担ってきているわけです。それはいったいどうしてかと申しますと、18世紀というのはロシアにとっては「学校の時代」であって、つまり西欧から明らかに学んだ時代であります。これはスラヴ派の立場からすれば、「ピョートル大帝以降、西欧から学んだから悪くなったんだ。」とこういう理屈になって、「学ぶ必要なんかなかったんだ。」ということにもなりましようけれども、しかしロシアがヨーロッパの強国になったのは、明らかに西ヨーロッパに学んだからであります。その西ヨーロッパに学んだ18世紀を研究するということは大変微妙な問題、ソ連時代には特に微妙な問題であっただろうわけで、だから多くの学者が粛清にあっているのですね。ディドロも、ソ連では戦闘的唯物論者ということになっているわけですが、もちろんディドロをそういう風にだけ評価するのは間違いで、非常に多面的な人なのですが、ソ連では次第次第に、ディドロを「正統的マルクス主義者の混じりつけのない先駆だ。」という形に仕立て上げなければ研究が続けられないという状況になってきました。1958年以降、前に述べました『18世紀文集』が定期的に出るようになったというのは、明らかにソ連における自由化・雪解けの影響がもろに18世紀研究にも及んだということでしょう。以上、お配りしたプリントの説明であります。本論に戻りたいと思います。

冒頭に申しましたように、このテーマは一種私の学問的な由来・経歴というものと関わっているので、私小説的なお話しをさせていただきます。私が教養学科のフランス科というのに入りました時に、18世紀研究をやるということになってくると、まず第一に人々が挙げましたのが、ダニエル・モルネの『フランス革命の知的起源』（«*Origine intellectuelle de la Révolution française*»）という本でありまして、これは非常に画期的な本でありました。エカチェリーナ2世なんかもそう考えましたし、当時の多くの人が考えたように、「フランス革命は、ディドロだとカルソーだとか大変危険な啓蒙思想家たちが煽りたてて、その結果出来上がった不幸な事件である。」ということでした。つまり

哲学者がフランス革命の種を播いたのであり、その結果がフランス革命であるというように長い間考えられていたのです。エカチェリーナ2世はディドロをペテルブルグまで呼んで、色々とディドロの意見を聞く。そして自ら「啓蒙専制君主」と呼ばれることを誇りにしていたわけですが、フランス革命が起きてしまうと、フランス革命のもととなったような哲学者たちをすっかり捨て去ってしまいます。その後、「いわゆる *philosophe* と言われていたフランスの哲学者たちがフランス革命の起源である。」という考えが定着するわけですが、この考えをダニエル・モルネはすっかりひっくり返したわけです。彼は今日でいういわゆるアナル派の歴史学と大変密接な関係があって、アナル派の根源をたどるとこのダニエル・モルネに至るわけです。ダニエル・モルネは、18世紀研究者として他にも色々なものを書いています。どちらかと言うとオーソドックスな新しみのない旧派の学者というふうには考えられています。しかしその内容はかなり革新的であったように思います。「哲学者たちがフランス革命の源であるというふうには考えるのは早急であって、もっと他の多面的な様々な現象が、あるいは事件が、フランス革命のきっかけになっているのだ。啓蒙哲学者たちはむしろ、革命家であるよりは *réformiste* であり、改革ということを専ら考えた穏健な人たちだったのである。」というようにモルネは考えたのです。最近のアナル派のフランス革命研究というのを見ますと、このモルネと同じように、より大きな歴史的な文脈でフランス革命をとらえようとしているわけです。ところで啓蒙主義者たちは、専ら「理性」ということを声高に謳ったわけです。イッポリット・テーヌの『フランス革命論』を読みますと、「18世紀の哲学というものは『理性』の時代を迎えたのであって、それ以前の“子供 *enfance*”の時代というものを捨て去って、やっと“大人 *majeur*”の時代になったのだ。そういった知的完成のところに哲学者たちが現れたのである。」とあります。「成熟した大人」ということはよく最近も言われます。「日本は子供であって、やっと大人になったのだ。」ということもつとに言われておりますが、大人になることがそんなにいいことかどうか、これもまたわかりません。そういう知的な面ということが、哲学者の場合には重要視されるわけですが、「フランス革命が知的な事件であったか？」という、これが知的なはずがないわけです。ところが、「フランス革命というのは反知的なるもの、むしろ情動的なるもの、そういったものの優越した事件だったに他ならないわけで、それを哲学者の方に全てを持っていくということは間違いである。」ということをもルネが最初に言った時には、人々は非常に驚いたわけです。しかしアナル派の色々な研究を見ても明らかのように、モルネの意見は大変正しかったように思います。私の第一の先生というのはこのダニエル・モルネでありました。

それから第二の先生は、エルンスト・カッシーラーでありまして、中でも例の『啓蒙の哲学』という本であります。これはあまりにも有名ですから改めて述べる必要はなからうかと思えます。私にとって大きな意味を持ったのは、ポール・アザールの『ヨーロッパ意識の危機』（«*Crise de la conscience européenne*»）という本でありまして、これは1935年、まさにルッポルの本と同じ年に出版されたが、これは18世紀研究の上では非常に重要な意味を持った研究であります。それまでは18世紀のフランスというのは要するにヨーロッパの中心でありまして、フランスの研究者たちにとってはヨーロッパとはつまりフランスのことであって、“*Europe française*”というような言い方を当時ではしたわけでして、フランスの領域から外へ出るということはほとんどなかった。ところがポール・アザールの研究はそうではなくて、ヨーロッパ文化の大きな文脈の中でこのフランスの18世紀というものを捉える。18世紀的なものはすでに1680年に始まっていて、そして、この1680年から1714年に至る時期を「ヨーロッパ意識における危機」というふうに規定しているわけです。つまり、非常に古典的で調和的な世界観から次の世代へと移る最大の *crise—crise* というのは「危機」という意味と、それから一種の「転換点」というような意味と、色々な意味があるわけでありまして、そしてポール・アザールはこの時期を捉えたわけで、この研究は18世紀を研究する上で重要な布石となりました。この本と出会ったのがやはり学生時代でありまして、その後野沢協さんの翻訳が出ました。これは大変いい翻訳で、ポール・アザールの多くの至らない点、つまり間違った点なんかも全部指摘した恐るべき翻訳であります。私にはそういうポール・アザールの誤謬とか至らない点なんていうものは全く目に入りませんでした。今挙げたような偉大な本との出会いが、私の学問的な道を決定してきたと思っております。ロシア文学に関して言えば、大学院に入ります時に、先程も言いましたが「露文」というものがありませんでしたから、比較文学の大学院に入りまして、論文はちゃっかりとレールモントフのことを書いたわけでありまして、その時にエイヘンバウムの研究と出会いました。ロシアのフォルマリストとの深い関わりというのはここから始まりました。それから、ソ連本国では非常に軽視され批判され続けているものが、豊富な内容を持っているということに気が付いて、なかなか手に入りにくいフォルマリストのものを意識的に専ら求めて読むというようなことをやって、それで今日まで至っているわけです。その途上で、例えばバフチーンとか、あるいはグレーヴィッチなどと出会うというようなことにもなるわけです。ポール・アザールとの出会いは、その後のバフチーンやクルティウス（『ヨーロッパ文学とラテン的中世』）との出会いと同じような、それ変わらない大きな意味を、私の場合には持ったように思います。

こういう個人的な関わりというものを一応申し上げたところで、18世紀全体の学問のその後のありかたという方にちょっと目を向けたいと思うのですが、「18世紀研究というのはどうしてこういう形で、いわば“横に切る”形で世界的な学会というものが成り立っているのだろうか？」という疑問が、当然湧くと思うのです。先程のプリントに載っていますように、全世界的な組織があるわけですね。もちろんそれは20世紀研究にあたって不思議ではないし、17世紀や19世紀などどれにあたって不思議はない。ルネッサンスだってそれと同じことで、こういう研究はどの世紀に関しても、規模の大きさはとにかくとしてあろうかと思いますが、ところが18世紀研究は、ちょっと例外的なほど強固で国際的な組織というのを持っているわけですね。そしてこれと似たような強固な組織を持っている時代研究がもう1つ他にあるわけです。それは中世学研究(médiévisme)であります。私が考えますに、中世と18世紀というのは、世界を“横に切る”という意味では、相似た構造を持っているのではないかという気がいたします。これは、既にクルティウスも自分の著書の中で述べ、グレーヴィッチも非常に重要なこととして指摘していることではありますが、つまり中世が恐らく世界の歴史の中では一番普遍的な時代であった。つまり、これはよく言われることですが、東は日本から西はジブラルタル海峡までほとんど共通の、まあ世界観というが大袈裟でありますけれども、世界観、宗教あるいは生き方というものが存在し得た。しかもお互いに影響関係というものがなしにそれはあり得た。よく言われることなので簡単に申し上げますと、要するにこの時代は普遍宗教の時代であって、例えばキリスト教、それからイスラム、それから仏教というようなものが、もちろん地域によって違っているわけですが、例えばキリスト教は、中近東で生まれてヨーロッパの方に行ったし、それから仏教は、インドから生まれて日本にまで至る、という具合に、国境を越えて普遍的な宗教として成り立ったというのがこの中世の時代であって、宗教が非常に重要なファクターになっているということが1つ。それから、封建制というのが典型的に成立したのがこの時代であることは言うまでもありませんし、それからもう1つは、農業というものが産業の基本であって、従って「農業的な発想」というものがこの時代の人々の生き方というものをある程度束ねているという形で、お互いに影響関係はなくても、1つの普遍的な「中世」というものを想定し得る。だから中世というものに関しては、いわば“横に切って”いって論ずることができる。だから、日本の中世学者とヨーロッパの中世学者がちゃんとした論議ができ得る、そういう共通の土台があるという意味で、中世というのは特殊な時代であったように思うのですね。

ところが、18世紀というのもじゃあどうかといいますと、これも実は大変な広がり

持っているわけです。つまりヨーロッパ、それもフランスを中心として生まれてどんどん広がっていき、イギリスと呼応し、それから中欧・東欧というものを経てロシアまで行く。さらにはアメリカまで行くわけですね。だから中世よりももっと広がっていくわけです。そして、ロシアという国がエカチェリーナ2世の時代になりますと、大黒屋幸太夫などが登場して日本とも繋がりが出てくることになるわけですし、当然その極東の地まで18世紀の「啓蒙」というものが広がっていく。アメリカ独立戦争の基本的なイデオロギーになったものは「啓蒙」という考え方でありますから、アメリカ大陸にまでそれが及ぶ。そうすると、ロシア—アメリカといういわば「極東—極西」(Extrême-Orient—Extrême-Occident) というところにまで広がっていく、そういう広がりというものの中に、この18世紀の非常に大きな特徴があります。「中世以上に共通の要素というものを、18世紀というものは持ち得るのではないだろうか?」、こういう考え方が恐らく18世紀研究者たちの心の中にあるのだと思うのです。後ほど私なりの感想を申し上げたいと思うのですが、18世紀は東洋、そして日本とも深く関わってくる共通の要素を持っているだろうと思うのですね。この18世紀という時代は、「宗教的なもの」の中にすら「理性的なもの」を入れようとした時代で、いわゆる *déisme* 「理神論」というものも生まれて、つまり神を非常に理性的に考えようとした時代であります。その時に中国の「天」の思想、儒教的な考えが非常に理性的なものというふうに西欧の人には考えられた。中国思想がヨーロッパの人々にとって、1つの思想の模範と言いましょるか、理想型というふうに考えられる時代になって、「中国的なもの」が大変もてはやされたわけです。この点に関しましては後藤末雄先生の『シナ思想のフランス西漸』という比較文学上の名著がありますけれども、中国の思想がフランス人を虜にするということも起きてくる。それにはおまけが付いていて、思想だけに止まらないで、例えば中国陶磁器というような物がヴェルサイユ宮殿にも飾られる時代になって、「中国趣味 *chinoiserie*」というのがこの時代のヨーロッパの一世を風靡することになるわけですね。そして、陶磁器のことを英語で“*china*”と申しますのはそれ以来のことです。ついでながら言うと、日本の影響というのは *japonisme* ですが、日本の典型的な工芸品と考えられている漆は、小文字で“*japan*”と言われているのは御存知の通りだと思います。

こういう東洋と西洋との繋がりというのは、明らかにこの18世紀の時には、今度は影響関係として存在し得た。中世の場合とここが違うわけですし、中世の場合には交通というものが不便であって、もっとプリミティブな先程言った色々な条件の下に、不思議な類縁関係というのが生まれてきたのですが、18世紀は明らかに、コミュニケーションというものが十分に発達していて、西洋と東洋とが現実に繋がってくるということが

ありました（もちろんルネッサンス時代にもそういうことはありましたが）。18世紀には「ロシア帝国」というものが存在していて、その整備された組織によって極東の地まで「啓蒙」というのが広がったということは、従来無視されておりましたけれども非常に重要なポイントであるし、それからアメリカ独立戦争という形で「啓蒙」がアメリカにおいて勝利したことも、ヨーロッパを越えて全世界中に広がったという意味で、大変重要なポイントを占めている。そして言うまでもなく、「啓蒙」という時代は、今日の、つまり20世紀の諸々の事象を説明するのに、絶対に欠いてはならない要素となっています。ことにアメリカという国の成り立ちに関してそう言えるし、ソ連というかロシアという国の成り立ちは、ピョートル大帝とエカチェリーナで説明するのが一番うまく説明でき、今日のペレストロイカ以後においてすらそうでありますから、この18世紀というものが現代の世界というものを読み解く非常に大きな鍵であるということは、誰でも考えることかと思うのです。しかし、それが意外に今までなおざりにされていたということを、残念ながら申し上げなければならないと思います。

この18世紀という時代なのでありますが、もちろん「啓蒙」ということだけで全部を言い尽くせるわけではなくて、後で時間があれば触れますが、ここには様々な問題が出てまいります。「理性」が中心であるということは申しましたが、しかし「感情」というものもそれとほとんど並行的にあって、「理性」を重視するか「感情」を重視するかということで、全く別の歴史が書かれてしまう、そういう危険性すらある。18世紀は「理性」の時代、「合理主義」の時代というふうに言われているけれども、実は「フリーメイソン」の時代であり、「薔薇十字」の時代であり、あるいはカリオストロなんていうとてつもない変な人間が出てきた時代であるし、サン＝ジェルマンのような神秘主義者が出てきたりというので、「神秘主義」というのもまた、その裏には確実に存在した。こういう2つの、普通に考えると両立しがたいものが共存している時代であるわけです。ですから、余計に学者たちは興奮して、議論する種は尽きないことになりまして、なかなかうまく統一的な結果が出ているとは言い難いのでありますが、それでも18世紀の中心的な、決して無視できない重要な要素としてまず挙がってくるのが、「啓蒙」という問題だろうと思います。そしてこの「啓蒙」という言葉は、日本語のイメージでは「教育」と関わる。つまり「蒙を啓く」というわけでありますから、無知蒙昧な人間を教え諭して、光の道の方へと導く。これは18世紀ロシアの最初の段階では、つまりカンテミールなんかが出てきた段階では、こういう形で捉えられていると言って間違いないわけなんです。しかしこの「啓蒙」という言葉は、西洋の言葉に置き換えてみると、これは全く別な響きを持ってくるわけですね。御存知の通り、フランス語ではこれ

は *lumières* と申します。複数形の *lumières* です。*lumières* というのは「光」のことではありますが、それは具体的な「光」であって、当然それは、その前に「闇」というものがあつたという認識から始まっているわけですね。そしてこれは、何もフランス語だけではありませんで、他のどの国の言葉をとってみてもそうですね。スペイン語の場合でも *siglo de las luces* と言いますし、英語の場合ですと *Enlightenment* と、まさに *light* というのが真ん中にある。ロシア語でも *просвещение* と、真ん中にちゃんと *свет* という言葉が入っている。ドイツ語の場合も言うまでもなく *Aufklärung* という言葉で、全部「光」という言葉が中心に入っているわけです。これは日本語で言う「啓蒙」というのとはちょっと違うわけですし、ヨーロッパの場合はもっと大きな時代背景を考えなければならぬと思います。

この「啓蒙」という言葉が、何語であれ大変な褒め言葉から成り立っているのに対して、「中世」という言葉は、非常にけなされた言葉でありました。つまり、「ルネッサンスと古典古代との間にはさまれた、真ん中にあるどうしようもない、要するに真ん中にただあるだけのくぼみみたいな時代だ。」というので、真ん中の時代「中世」というふうに言われていたわけで、従って「中世」という呼び名は—もちろん中世の時代の人々は自分たちのことを「中世人」なんて言わないわけですね—後の人が、「真ん中のどうしようもない時代だ。」というので「中世」という名前を与えた。いわばこれはけなし言葉であります。実際はどうであったか、これは歴史の常識でありますから簡単にだけ申し上げますと、中世は全て悪い時代であつたというのはむしろ間違いで、12世紀や13世紀というのは「中世ルネッサンス」と言われているように、文化的にも非常に豊かな時代であつたのです。ついでに申しますと、16世紀というと「ルネッサンスの時代」だ、これはもう「光り輝く時代」だ、と誰でも思うのでありますが、実際は16世紀の後半から17世紀にかけての約1世紀半というのは、大変厳しい時代であつたようであります。史上最低の寒さというのが襲って、テムズ川も凍り付いちゃって、人々がある上で牛を焼いて食べたとかですね、まあ色々な記録が残っているようです。それから、アメリカのハドソン川が凍り付いちゃって、普通の船は使えなくてアイスボートという氷の上を走る船が使われていたとかですね。とにかく「凍り付いちゃってどうにもならない時代」、それから「宗教戦争が繰り返されて殺戮が行われていた時代」、それが16世紀から17世紀にかけての時代だった。ダニエル・デフオーの『疫病流行記』なんてものがありまして、それを見ますと、ペストだとかが襲って大変な数の人がばたばたと死ぬというような、不幸な時代であつたわけですね。それからもう1つ、今日のヨーロッパと非常に大きく違うのは、至る所森だらけであつた。中世もそうでありまし

たが、17世紀までのヨーロッパの森というのは、どんぐりの実とかが沢山ある森でありまして、当時は豚をその森の中に連れて行って、どんぐりの実を上からボンボンと落として食べさせて、そして育てていた、まあそういう時代だったようです。つまり、鬱蒼たる原生林というものがヨーロッパをずっと覆っていて、まさに「闇」の時代だったわけです。社会秩序が乱れていて、そういう森が沢山あって、ですから当然、まずその森の住人である狼が盛んに出てくることになりますね。例の童話で知られている『赤頭巾ちゃん』というのがありますが、これに狼が出てくる理由というのもそういった所にあるわけです。ところが17世紀の後半になって、さらに18世紀にかかる頃に、気候が好転してきて、人々がどんどん森を切り開いて、そして畑を作り、農業生産がどんどん向上していった。まさにそこに *lumières* というものがあつたわけですね。ここで18世紀というのが実は始まっている。つまり、明るい展望が広がっていくことになるのです。だから先程のポール・アザールの「危機・転換点」というのも、まさにちょうどそういう時期にあたっているわけですし、そういう転換点にあつて18世紀という時代が始まったということ、思い起こす必要があるわけです。つまり、文化史とか文学史とか思想史というふうに区分していくと、実はそういうことが見えてこない。だから、例えば文学をやる場合でも、そういう歴史全般の幅広いところを見ていかないと、例えば今申しましたような本当の *lumières* という意味が捉えられないというようなことが出てくるのではないかと、いうふうに思うわけでありませう。

それで、先程申し上げました「二元性」という問題に戻りますと、「啓蒙」と申しますとどちらかという「啓蒙思想」とか「啓蒙思潮」というふうに呼ばれていて、当然そのイデオロギー的な面が重視されてくることになります。18世紀の世界観的な側面を代表するのはもちろん「啓蒙」ということになり、文学の側から見てくると、それと18世紀の文学がどう関わっているかということが、論議の対象となるわけです。これは非常に大事なポイントです。つまりこの次に来るロマン主義は、1つのイデオロギーであると同時に、1つの重要な文学潮流でもあつた。ロマン主義は大変世界観的な、あるいはイデオロギー的なものを内包している文学の流れであるということが言えるわけですね。ところが「啓蒙」の場合にはどうもそうではない。つまり、「啓蒙」は文学様式ではないわけです。では文学様式としては一体この18世紀の時代はどういったものであつたのか。これは色々議論が分かれるところではありますが、従来の古典的な議論、つまり一般的に行われている議論でいきますと、文学と思想というふうに分けるということをしなかつた。ある意味では非常に大雑把であつたわけですね。ところで歴史をずっと見ていくと、1770年前後に大変な危機がやってくる。実はポール・アザールが後に批

判されることになるのは、「1680年から1714年という年は必ずしも *crise* ではなかった。むしろ本当の *crise* というのは1770年頃に来るのではないか。あるいはもっとロマン主義の前後に、より大きな危機がやってくるのではないか。そう考える方がヨーロッパの歴史を見ていく上で重要なのである。」ということが論議されるようになってからで、ポール・アザールの立論がかなり弱められているというところがあるわけです。1770年前後に一体何が起きたかという、例の *Sturm und Drang* というのが起きてくるわけですね。この時代を古い伝統的な考え方では「プレロマンティズム」とか「プレロマンティスム」という形で定義しました。「ロマン主義の前駆的な動き、つまり感情優位というようなことがここで始まって、ジャン・ジャック・ルソーなんかもそういったところから出てきたのだ。」と、こういう説明がひと頃はされていたわけでありませう。

しかしこれは、18世紀の「時代スタイル・様式」というものをどういうふうに定義するかという、より根源的な問題と関わってくるわけですし、この分野ではロシアのユーリイ・ロートマンなんかを始めとする記号学の人たちが非常に大きな貢献をしているわけですが、今日はちょっと余裕がありませんのでその事については申し上げます。「18世紀の『様式』というものを一体どういうふうに捉えるか。」、つまり、二元的な対立があると先程申し上げましたけれども、「そういう『様式』の面から見ると、この対立がうまく統一的に捉えられるのではないか。」ということに、18世紀学の大きな関心が集中しているわけでありませう。基本的に言いますと、「18世紀の文学様式は『ネオ・クラシック』である。」というのが一応の結論であります。これは「クラシズム」の定義とも関わってくることになります。フランス文学がヨーロッパ文学の中心として捉えられていた時代には、「17世紀のフランスのラシーヌとかコルネイユとかモリエールとか、そういった人々がヨーロッパの文学のいわば中心を成すのであって、そしてフランス文学というのは、本質的に非常にクラシックな特徴を持っているのだから、17世紀のフランス文学こそヨーロッパ文学の要である。つまり、古典主義というものこそヨーロッパ文学の基本概念だ。」というふうに考えられていたわけでありませう。ところが戦後になると、この考え方は大きく変わってまいりました。つまり17世紀という時代は、先程もちょっと社会史的なところで申し上げましたけれども、激動の時代、社会的にも恵まれない不安な時代であって、例えばパスカルという17世紀の典型的な人物を取り上げてみても、決して古典的な調和という考え方では説明できない。むしろ、時代の不安というものを非常に強く体現している人物であり、「彼の生きた時代の主潮はむしろ別なところにある、つまり『バロック』が17世紀の基本概念である。」という考え方が出てきました。これは主としてドイツの学問から出ているわけですが、フランスにお

いてもバロックの流れは非常に強力であって、その中の例外的に調和的な存在が古典主義として誕生したのだというわけです。従来古典主義は、宮廷文化と密接に関わっており、絶対主義と密接な様式なのだと考えられていて、それはその通りなのでありますけれども、じゃあバロックが宮廷と関係がないかという、「バロック的祝祭」という言葉がありますように、実はバロックは宮廷的なものと繋がっており、宮廷という強大な権力のバックなしには成り立たないわけでありまして。ロシアではピョートル大帝からアンナ女帝の時代は、建築とか美術の面で言えばバロックの時代であります。ロシアはこの点では西ヨーロッパから少し遅れています。そこで、「古典主義というものが1つの様式として普遍的に支配するようになったのは、18世紀になってからではないか。つまり『ネオ・クラシック』という形をとって成立したというふうに考えるのがいいのではないだろうか。」ということになります。しかしそれと同時に、バロックという要素は18世紀にも国によってはかなり残る。フランスにおいては美術面ではかなりロココ的なものになっていくけれども、中欧・東欧、あるいは場合によってはドイツも含めてですが、そういった国では「バロック的」なるものが非常に強力な形で残り続けるわけでありまして。

では、先程触れた1770年前後の *Sturm und Drang* に代表される変化というものはどう考えるべきか。「これはロマン主義に直行するものではなくて、新古典主義（ネオ・クラシシズム）の中での1つの大きな揺れというふうに見るのがいいのではないか。」というのが、少なくとも今日におけるヨーロッパの18世紀研究の大凡の結論のように思われます。従って、以前使われていた「プレロマンティシズム」というような概念は、使われることはあまりなくなった（もちろんそれを強固に主張している向きもないわけではありませんけれども）。もっとも、この18世紀後半の様式の変化には、非常に難しい問題が沢山あります。これは時代の流れ、社会的な出来事も関わってくるわけですね。例えばどういうことが起きたかという、ポンペイの発掘とかヘルクラネウムの発掘とか、要するにギリシャ・ローマ時代の遺跡の発掘ということが当時盛んに行われた。そして、例えばヴィンケルマンのような人が現れて、ギリシャ・ローマの美というものを非常に強調するようになる。そうすると、古典的な趣味というのが甦ってくることになるわけです。そして、18世紀末から19世紀にかけて、こういう古典主義的なものの再復興というのがもう一遍出てくるのです。18世紀前半にこの「ネオ・クラシック」なものが非常に強いと言われていますが、18世紀から19世紀にかけて、更にもう一遍こういった勢いが強まってくる。その中で例えば、御存知のワシントンのホワイトハウスというような建物が造られる。あれはネオ・クラシック様式でありまして、このこと

は当時の新古典的なものへの復帰ということなしには考えられない。それからペテルブルグの多くの建物が新古典的な様式でまとめられているのは、エカチェリーナ2世が新古典的なものを大変好んだ人であるということのためです。ペテルブルグという町に関して言えば、ネオ・クラシックの趣味でもって統一されていますが、アンナ女帝のバロック趣味やエリザヴェータ女帝のロココ趣味というものがそこに加わるということがもちろんあるわけで、18世紀全体の問題としては大変つかまえにくいところがあるように思われます。

それからもう1つは、「『理性』と『感情』という2つの対立するもの、これを一体どういうふうにつかまえるか。」という問題があります。「理性」と「感情」は全く相反する概念であると、人は思いがちであるし、事実そうであるかもしれません。しかし理性だけの人間というものがあるわけではなく、また感情だけの人間というものもない。やはりこれはある程度、1人の人間の中においても、あるいは1つの歴史の流れの中においても、相互互換的なものであって、どちらにウエイトがかかるかということはかなり微妙な問題であるわけですね。例えばヴォルテールのような人間であれば、これは理性的なものがかなり優越しているというふうに言えますが、ルソーになってくると、これは感情的なものが非常に優位に立つ。しかし理性的なものがないとは言えない。ディドロになりますと、大雑把な言い方をすると丁度その半々ぐらいになってくる。そうすると、この「理性と感情というものはどっちが重視されるか。」という問題について言えば、カテゴリーが違うのだから、全く対立するものだと考えられていたとすれば、それは我々の思い込みがそうさせたのであって、当時の人々にとっては比較的相互に入れ替わることができ得たものではないだろうか、というふうに考えられるわけです。この点で大変おもしろいのは、チジェフスキイという文芸学者がおりますけれども、この人が「クラシシズムから啓蒙、それからロマン主義に移り変わるその時期において、1つの転換が起きただけである。」と言っています。デカルト以来、「理性というのは万人の心の中に平等に蒔かれた種である。」という考え方があった。この「理性」という言葉に代わって「感情」という言葉を置き換えてみると、18世紀に起きたことが容易に説明し得ることになる。つまり、人間の平等の主張が、以前は「理性」という立場で行われていたわけですが、ただ「理性」ということになると、大人と子供というふうにグレードの違いがある。やっぱり教育を受けないと理性的にならなくて大人になれない。それから、教育のある人とない人では、これは部類が違うわけですね。ところが「感情」という立場に立てば、むしろ子供の方が豊かではないだろうか。大人になって経験を積んでくると、不純なものが入ってきてかえって悪くなっていくんじゃ

ないか。その点子供というものは、不純なものがなく、豊かな感情も持っているから、むしろ子供の方が優越しているということになる。ここからジャン・ジャック・ルソーの非常に徹底した「平等思想」が生まれてくるわけですね。

この「大人と子供」という二項対立であります。これを「先進文化を持っている国と後進文化の国」というふうに置き換えてみますと、これはルソーやヘルダーを繋ぐ非常に重要なドクトリンになってくるわけですね。この対立はさらに、「**experience** と **innocence**」という二元対立として扱われる。これは御存知のイギリスのロマン派の中心的テーマになるわけですね。つまり、人は生まれながらにして **innocence** であって、純なる魂を持っている神の子であったのが、経験 **experience** を積むと悪に染まって悪くなっていく。ルソーはこれを「自然と文明」という対比でつかまえました。そうすると、「要するに『文明』で悪に陥ったというのは先進国、つまりフランスである。それに対して、フランスより更に遅れてやってくる国ドイツは、それに冒されていないだけ優れている。」というふうに、例えばヘルダーは考える。そしてこのヘルダーの考え方は、中欧・東欧やロシアにおいては、大変恵みの教説として聞こえるわけですね。「自分たちはそういう悪に冒されていない度合がそれだけ強い民なのだ。」ということになります。「スラヴ主義」というのは、いわばそういう土壌の上に当然のことながら生まれてくることになるわけであり。このように、「理性」と「感情」を対立するものとしてだけ捉えるのではなくて、相互互換的なものとして捉えるという見方で 18 世紀を考えていくと、今までとは全く違う図柄というのが出てくるわけであり。それからこのことに関しては、優れた研究が沢山出ております。「理性」の発展の歴史、つまり「啓蒙」の展開の歴史というふうに 18 世紀を捉えるのと並行して、「感受性」が発展していったロマン主義に至る一連のプロセスとして 18 世紀の歴史をつかまえるという、ダニエル・モルネ以来の 18 世紀研究が文化史の領域にまで拡大されていった結果として、そういう優れた研究が出てきたわけです。代表的なものは、ピエール・トラアールという人の 18 世紀の **sensibilité** 「センシビリティー」の研究というものに結実することになるわけですね。そしてその結果、先程申し上げました 18 世紀後半の従来「プレロマンティズム」と言われていた時代の文学的流れに対する用語がすっかり変わって、「センシビリティー」というのがこの時代の時代概念として当てられることになったわけです。ロシアでは伝統的に「センチメンタリズム」という名前が与えられておりまして、これがぴったりそれに当たるわけです。これは **Empfindsamkeit** とか **sensibilité** とか、色々な名前では呼ばれるわけですが、それが 18 世紀の末の一時期というものを指すということになって、その結果「プレロマンティズム」という言葉が時代遅れの **obsolète**

なものになってしまうということが、その結果として生じてくることになったわけであり
ます。

実は用意してきたものをやりますと、あと1時間以上もかかっちゃいますが、あと30
分で終えなければなりませんので、話を若干ロシアの方に収斂させてお話ししていきた
いと思います。その前に、先程のハンガリーを中心にいたしました多くの仕事がございます
ますが、これは実は大変膨大な議論の蓄積でありまして、これを全部紹介するというの
はとてもできることではありません。そのうちで若干目立ったことを幾つか申し上げて
おきたいと思います。いずれも「ハンガリーと中欧及び東欧における『啓蒙』」と題さ
れているもので、先程お話ししたことのかなりの部分が、この中でも展開されているわ
けですけれども、基本的に1970年に出たものが最初のものであります。先程から申し
上げておりますように、全ヨーロッパ的に見て1960年代前後に（ロシアの場合で言い
ますと1958年以降というのが大体それに当たるわけですが）、18世紀の横並びの研究
というものが盛んに行われてきたその後を受けて、ロシアとかあるいは西欧のイギリス
やフランスやドイツなどの特定の国に固まる傾向があったものを、中欧や東欧というも
のを中心にして、それに対する若干の修正やより普遍的なものを目指す討論が、長い年
月をかけて行われてきたわけでありまして。そこで何が一番問題になってくるかという
と、最近言われる *interdisciplinary* な方法、つまり単に文学というだけじゃなくて、音楽も歴
史学も地理学もという、全部そういったものを複合したような形でなければ、成果があ
がらないということ。それからやっぱり、国と国との比較というものなしには、こうい
う研究は成り立たない、そういう原則がここで立てられることになるわけですね。それ
から非常に大事なことは、中欧や東欧という一種の後進地域では、「啓蒙」というのは
必ずしも18世紀で完了しないということです。これは非常に大事なポイントでして、
つまり「19世紀のむしろ半ばぐらいまで『啓蒙』の本来の意味での働きというものはあ
るのだ。」という認識です。私の個人的な意見を申しますと、例えばロシアの場合でも
そういうことはあり得ます。だから、「18世紀のロシアの『啓蒙』というものは18世紀
では完結しないで、実はトルストイという人物の中で、18世紀的な『啓蒙』の考え方
というのはもう一遍甦る、それも強力に甦っている。」というふうに、私は思っているわ
けであります。それから、従来「啓蒙専制君主」と言われていますように、*despote éclairé*
というのが普通の用語であったわけですが、*despotisme éclairé*「啓蒙専制主義」という
表現になってくるとちょっとおかしいというので、かなり多くの賛同を集めた言葉が
absolutisme éclairé、つまり「啓蒙絶対主義」という用語であります。この表現を立脚点
として、統一的な新しい研究が出てきております。こういう観点からロシアの場合を見

ますと、「ピョートル大帝からそれが始まっているというよりはむしろ、その前のアレクセイ・ミハイロヴィッチ帝の時代から、つまり 17 世紀からロシアの場合には『啓蒙的』なる治政、つまり『啓蒙絶対主義』というものが始まっているという新しい視点も、あるいは見出されるのではないか。」というふうに考えられるわけですね。それから、「様式」ということに関してであります。これはドイツから始まって中欧・東欧殊にハプスブルグ家というもの、あるいはロマノフ家のロシアというものを通して見ると、宮廷的なもの力というものが非常に大きく働いていることがわかるわけですし、そこに「ネオ・クラシック」と「バロック」、それから「ロココ」の不思議な共生関係というものがあるのではないかという指摘が、ここでかなり取り上げられている。ですから、従来はロシアは研究の 1 つの中心点でありましたし、それからフランスを中心とした西欧というのが、18 世紀研究の言うまでもなく中心点であったのでありますけれども、「中欧・東欧」という視点を導入すると、かなり新しい見方がこれから出てくるのではないかという、そういう感じがいたします。

さて、本日のもう 1 つのテーマ、つまり「ユートピア」のテーマに移らなければなりません。「なぜ 18 世紀にユートピアが数多く出てきたか。」ということが問題になります。18 世紀のユートピアの特徴は、先程の話とのつながりで言いますと、「理性」の問題と関わっています。「理性」の時代、つまり「大人」の時代であるはずの 18 世紀に、大人が理想社会というものを夢想するということがあり得るのだろうか。エルヴェシウスのようないわば機械論的な考え方に立てば、「社会なんてものの組み立ては非常に簡単であって、理性が打ち勝ちさえすれば、つまり恥ずべき偏見というものがなくなれば、理想的な社会がやってくるのだ。」という考え方になります。ヴォルテールなんかはある意味では単純で、「Ecrasez l'infâme.」という有名な言葉に代表されるような考え方、要するに「迷信とか偏見とか、そういったものを除去してしまいうことができさえすれば、人々は理想的な社会というものを作り得る。」という、割と単純な考え方の持ち主であったわけですね。20 世紀でもこういう考え方はあるわけで、「理性的なるものでないものを全部排除すれば、社会というものはよくなるのだ。」という考え方があって、こういう考え方をお持ちの方が沢山いらっしゃるわけですね。「3 分間理性で考えてわからないものは下らないものだからやめちゃえ。」という、ドストエフスキが非難した考え方というのを持っている人がいるわけです。受験戦争なんかでも、予備校では「3 分間考えてわからないものは捨てろ。」というふうに教えているそうでもあります。これは○か×かの問題だから仕方がないのですが、そういうふうにして育っちゃった人間が、いわゆる何と言うのでしょうか「理性的でないもの」と呼んで捨て去ってしまうものの

中に、非常に貴重なものが沢山あるに違いない。ヴォルテールなんかを見ていくと、そういった危険性というものをちょっと感じるわけでありませう。

じゃあ一体、「理性」をそれだけ信仰している人たちが、どうして理想的な社会なんでものを夢想するということが起きてくるのだろうか。何しろ 18 世紀には、こういうユートピアがやたらにあるんですね。もちろんその中には、理性的なものを生かして未来社会を構築しようという考え方が結構あります。ただこの場合の「理性」というのが、何て言うのでしょうかね、想像力たくましいと言うか、非常に幻想的な倍音を伴っていることが多い。いい例として、例えばレチフ・ド・ラ・ブルトンヌという 18 世紀後半の不思議な、今日で言うと「幻想文学」というジャンルに当てはまる作家がありますが、この人の作品の中に「未来社会計画案」というようなものが出てきて、そういうのを見ますと、何か「ユートピア」とか「理想社会」とかそういうことを考えると不思議なデーモンが付いてきちゃうというのが、どうも「ユートピア思想」というものの 1 つの特徴のように思われるのですね。いきなりこういう言い方をすると、非科学的な言い方ですけども、そう言わないと説明しきれないところがある。ディドロの場合もそうなのでありますが、彼は理性的な唯物論者ですけど、例えば『ダランベールの夢』だとか『ブーガンヴィル航海記補遺』のような作品でユートピア的な夢を育みだすと止めどがない。そういったものがどんどん増殖していくことになる。つまり、そういった想像力とか観念の増殖ということが起きて、「ユートピア的想像力」というものが一掃出てくると、18 世紀の理性主義者の中でも、これは止めどのないものになってしまうわけです。しかし、止めどのないものをいわば「素面」でもって造るということは大変難しいわけで、そこに 1 つの仮構、つまり創作的手順というものが出てくることになります。ディドロの場合で言うと、例えば『ダランベールの夢』のように夢物語というふうに設定したり、あるいは旅行記という形で造りあげていたりします。この 18 世紀のユートピアものは、その殆どがと言っていいぐらいに旅行記の形をとっているわけですね。つまり、「ユートピア旅行記」という形をとるわけでありませう。この「ユートピア旅行記」というのはおそらく、これはまだ私も十分には調べていないのでありますが、中欧・東欧やロシアというところを探してみると、若干のものは見つかっておりますが、もっと普遍的に存在し得たような気がいたします。また同時に、ユートピアは「社会風刺」を濃厚に含んでいるものでもあります。18 世紀のロシアの旅行記ジャンルというものを見ればまさによくわかるのですけれども、「誇張」とか「理念化」とかが入り込んだ、かなりユートピア・ジャンルと近い形で書かれることが多いというふうに思います。それから、18 世紀を最終的に締めくくったフランス革命も、いわゆる「千年王国

millénarisme」的発想の爆発というふうにと考えると、「フランス革命はまさにユートピア領域、つまりユートピアの近接領域の民衆の想像力の解放という形で起きたのだ。」というふうに言ってもいいのではないかと、という気がいたします。

それから 18 世紀の大きなテーマとして存在し得るテーマがあります。これは今までの系統的な、つまりイデオロギーとか世界観とかいういわば「抽象的」な次元とはかなり違う側面から出てくるものなのですが、それは「樂園」とか「庭園」、つまり garden というテーマであります。このテーマを中心に据えて 18 世紀のものを見直していくと、非常に多くの発見があるのではないかと。その 1 つのヒントは、例のリハチョーフの『庭園の詩』にあります。日本語訳は『庭園の詩学』というふうになっておりますが、17 世紀からピョートル大帝の時代にかけて、ロシアの普通の人々の思考形態にいかにか「庭園」というものが重要な意味を持ったかということが、見事に描かれています。今日ではほとんど忘れ去られてしまった、フランスのジャック・ドリールという田園詩人、あるいは多くの牧歌（イディール idylle とかパストラル pastorale とか）の作家などが、沢山浮かび上がってくるようになります。そして、この側面から 18 世紀のロシア文学を見ていきますと、例のシメオン・ポロツキイの《Вертоград многоцветный》、あの有名な『百花の園』ですね、あれから始まって非常に数多くの田園詩・樂園詩というものを見出すことができると思われるわけです。

これは 1 つの現象の指摘であります。18 世紀文学全体を通して見ますと、その前半のかなり多くの時代、あるいは後半まで入り込んだ、つまりエカチェリーナ 2 世の時代まで含んで、18 世紀ロシア文学は一種の「自らの国家をユートピアとする文学」であると言えるでしょう。かつてシニャフスキイが社会主義リアリズム論の中で、「ソヴィエト文学というのは、18 世紀の文学と大変似ている。」という警句を発したことがあります。つまり、ソヴィエト文学というのは一種の State Literature であって、「国家」というものを至上とする、つまり国民自らが、自分を支配しているその国家自身を 1 つのユートピアとしてたたえるという構造で成り立っている、そういう文学であるというふうに定義したわけです。これは御存知のスターリン時代がそうでありまして、昔のソヴィエト国歌（гимн）はまさに、レーニンが産み育てスターリンが養い育て云々という詩句を持った国歌でありますし、「スターリン・カンタータ」なんていうのが作られた。これはまさに古典主義です。「社会主義リアリズムとは古典主義なり。」というのがシニャフスキイの考え方で、彼によれば 18 世紀の文学というのは、ソヴィエトも顔を背けるほどの「プロパガンダ文学」である。ロモノーソフの、例えばエリザヴェータ・ペトローヴナの即位の時の詩だとかですね、トレジアコフスキイのモスクワ賛美の詩だとか

ペテルブルグ賛美の詩なんていうのを読んでいますと、もうパターンは決まっています、「ネヴァ川の華に対してセクウアナの川（セーヌ川）は恥じるであろう。」とかです。つまりロシアという国がいかに豊かで優れていて、セーヌ川も顔を背けてしまうぐらいに素晴らしい国かというようなことを延々と誉めたたえる、まあそういう文学であったということですね。だから、非常に悲しい逆説的なことでありますけれども、18世紀のロシア文学というのはひょっとして、「自らをユートピアとする」文学、つまり後にソヴィエトで再現されるような、非常に「ソヴィエト的」な文学だったのではないか。そういう視点ではなかなか18世紀文学を読みませんが、デルジャーヴィンまで含めた18世紀の詩人たちは、宮廷とは切っても切れない縁があるわけですし、そういうものを誉めたたえることが作家の職分であり、作家の身分というものはまさにそういうものであった。そういう意味では、これはソヴィエト作家同盟に所属するソヴィエト作家たちと変わらない。かなり多くのアナロジーというものがそこに成り立っているのではないだろうかという気がするわけがあります。

あんまり時間がなくなりましたので、さらに話を端折ることになりますが、このような形で18世紀というのを色々な視点から多面的に見ていくことが（一切のイデオロギー的タブーというものと我々は今や離れているものですから）できますが、私は18世紀を先程中世と比較いたしました。どちらの時代も、1つの普遍的な“横に切った”時代として見るができるということです。ただ、中世は影響関係というものなしに1つの普遍的な性質を持ち得た時代だったのに対し、18世紀は影響関係というものが明らかにあった時代だったという、そういう違いがあるということは申し上げました。しかし、影響関係によって決定されないのに共通点があるというのも、一面の事実であります。「日本における18世紀」というものを考える場合に、例えば大黒屋幸太夫が向こうに行って帰ってきて、そしてその聞き書きというものが取られ、それが1つのきっかけになって、外国への関心が日本でも高まるということがあって、間接的な影響があったというふうに考えられないではないわけがあります。それから蘭学というものがありまして、18世紀の様々な学問や学術というものが日本にも入ってきた。それから先程の中欧・東欧の例で言いますと、やはり日本の場合には19世紀半ば、つまり明治期こそまさに「啓蒙」の時代だったわけですし、「『啓蒙』というのが18世紀に限るものではなくて、19世紀半ばまで残っている。」という中欧・東欧の図式は、まさに日本の場合にも適合するであろうというふうに言えるわけですね。しかし、私が今言おうとしているのはそういう事ではなくて、そのような影響関係なしに徳川期の日本の文化とか思想の中に自ずと生まれた傾向というものが、かなりヨーロッパと近いのではないかとい

うことを言いたいのであります。具体的な例を挙げますと、例えば安藤昌益とか三浦梅園とか色々いるわけでありましたが、基本的なポイントは一体何かというと、その1つは「土」の思想ということだと思えます。つまり、農業とか土というものが基本と考えられていて、その上で1つの重要な思考が芽生えるということ。それからさらに言いますと、18世紀の商業的体制という mercantilism 「重商主義」であるということは、17世紀以降のヨーロッパの非常に大きな特徴点でありました。この点から言えば、日本でも江戸期の商業資本主義の発展というのは非常に盛んなものがあつたわけで、mercantilism は確かにすでに日本でも成立していたわけでありましたが、その中で「土」を重視する思想、これは一種の「重農主義」と言ひましようか、そういうものが生まれてくる。洋の東西でこのような思想は、決定的に18世紀を左右する重要な意味を持ち得ることになるわけですね。そしてこれはルソーにも繋がる、つまり「土」とは即「自然」の思想なのであります。安藤昌益の本は『自然真営道』という題名でありまして、「自然」というものを中心に据えたこの発想、つまり農業を基本とする考え方は、まさに江戸期において日本で非常にユニークな発展をみたわけですね。そういった意味で例えば、これは以前にちょっと書いたことがあります、アメリカのジェファーソンとロシアのトルストイとの間に、非常に大きな共通点が見出される。つまり、「『土』や『自然』というものを『文明』と対比して、それを抛り所とする。」という、ルソーの直弟子と言つていいような考え方が、19世紀にまで至る。そしてアメリカからロシアにまでそれが響いていって、これがまさに安藤昌益にも見られるということが言えます。それからもう1つのポイントは、やはり18世紀の「啓蒙」というものが、いわゆる encyclopédiste 「百科全書派」と言われているように、諸学・実学を重視していたということ。それも単なる実学というものだけではなくて、「技術的なもの」の普遍性ということであつて、そういったものの系統化を通して「百科全書的」な学問が発展したということですね。三浦梅園の場合なんかは明らかにそういう系統的整理が見られますし、それから日本の江戸期の「博物学」や「本草学」というようなものは、まさにこういったものであつたらうと思われまふ。そういうような色々な視点を通して見ると、18世紀というものをこんなふうに様々にまとめていける可能性があるということなんです。

ちょっと言い忘れたことで、重要なことを1つだけ申し上げておきます。「18世紀のロシアで何が一番重要か。」という、これは確かりハチョーフが言つていたことだと思ひますが、ヨーロッパ式の庭園というものをロシアに取り入れる時に彼らが非常に重要視したことは、「庭園」というものにまつわるパラダイムやシンボルといったシステムをロシアに導入することでした。つまり国家体制の整備が、庭園の整備という仕事の

背後にいつもあったわけで、庭園設計とか都市の建築は国家的シンボルの集大成だったということです。18世紀のロシア文学については、東大のロシア文学科でも何遍か扱ったことがあります。その度に「退屈だ。」と嘆く学生諸君をほとんど悲しみのどん底に陥れたことがあったと思うのですが、何故一見つまらないように見えるかという、つまりその面白さが文学自体にではなく、その背景にあるということなのですね。ギリシャ・ローマ神話のシンボルでもって皇帝や女帝たちを誉めたたえるということの繰り返しの繰り返しなものですから、退屈に見えてしまうわけです。エカチェリーナ2世なんかはそういった点を十分に心得ていて、自分が「ミネルヴァ」と呼ばれたり、あるいは黄金時代を象徴する神であるアストライア *Astraea* に自分が喩えられると、嬉しくて仕様がなくて、デルジャーヴィンが«Фелица»なんて詩を書けば、そりゃもう「愛い奴だ。」と言って誉めたたえる。まあ色々褒賞なんかも与えるというようなことになっているわけがあります。だから18世紀文学というのは、文学それ自体として読むと「何のことか？」というように思われるかもしれませんが、ちょっと弁解めきますが、ロシアの権力構造とか社会とか政治とか歴史とか、そういった大枠を通して見ていくと、興味津々という感じで読めるのではないか。何か出し遅れた証文みたいな気もしますが、18世紀を専門とする学生が私の教え子の中からは実はほとんど出ていないということは、私の不徳のいたすところではありますが、私が辞めるこの時をその1つの機会として、これからそういう人に出ていただきたい。これを結びの言葉と代えたいと思います。どうも御清聴ありがとうございました。

(平成6年3月3日 最終講義)